

対音資料研究法叙説——case2: 蒙古字韻(2)

(前号より続く)

5. 「o」の異体字

母音「o」の通常字形は「**^**」であるが、「-on」「-onj」「-ov」のように韻尾が続く場合には「**^**」となる。中野美代子(1994:pp.111-112)は「**^**」と「**^**」が音価を異にするという見解をとるが¹、開音節で「**^**」、閉音節で「**^**」という正書法の問題としてとらえるのが妥当であり、字形の違いから直ちに音価の違いを想定するのは無理がある。

モンゴル帝国の公用文字としてチベット僧が考案したパスパ文字には、当時モンゴル語の表記に用いられていたウイグル文字と考案者の使い慣れたチベット文字の双方の特徴が見られる。ほとんどの文字要素の字形と音節単位での分かち書きはチベット文字から、そして左から右への縦書きと連結線はウイグル文字からの影響である。連結線はウイグル文字では語の単位で中央(やや右寄り)に記されるが²、パスパ文字では音節単位で右端に記される。唯一の例外が「o」の連結線で、中央に記されて「**^**」となる。

近代のチベット紙幣に用いられたパスパ文字では、「**^**」に相当する字形を持たず、子音が続く場合でも連結線は右端に来る。しかし漢語、モンゴル語、さらに敦煌の六字真言などに用いられるパスパ文字でも「o」の連結線は中央に引かれており、これが本来の正書法であることは疑いない。

ところで、なぜ「o」の場合だけ連結線が中央に記されるのかは謎である。ウイグル文字の連結線で「o」が特別に扱われることはないし、チベット文字はそもそも連結線を用いない。美的観点からの説明もすっきりしない。「**monj yol**」のような語において中央に連結線がある場合、確かに堂々とした綴りに見えるが、それは詰まる所“慣れ”の問題であり、右端に連結線があったとしても不都合があるとは思われないのである。

6. 「n」の異体字

「n」についても、『蒙古字韻』ロンドン写本では 2 種の字形がある。通常は「**^**」であるが、母音「o」に続く場合のみ「**^**」となる。中野(1994:pp.113-115)ではこれら 2 種の「n」にも異なる音価を想定する³。そこでは、「-on」という韻母の問題として、その音声的特徴を論じているが、「o」

¹ 表現としては、2 種の「o」の音価が異なるとは明言していないが、「**^**」という表記がいかなる音価を表すかということが議論の俎上に上げられており、「**^**」とは別の音を表すと考えていたことは明らかである。なお、中野(1994:p.110)は、モンゴル語表記では「**^**」が“甲類の後舌母音”(=男性母音)に属するというのが、実際には「**eog**」(=/öǰ/)など女性母音にも用いられる。また「**^**」が後舌母音であることはシナ語文献からも証明できるとして、山撰合口韻において「**^**」が[o]を表すとするが、「**^**」とどのように違うのかということは説明されていない。

² 母音はすべて連結線の左に記されるから、母音を基準とすれば、連結線は“右端”にあると言えないこともない。

³ 中野氏によれば、「**^**」は口蓋垂音[N]であるというのが、日本語の読みを根拠とした論は余りにも

の場合と同様、「n」についても文献学的な整理が不足している。「𐠨」の字形を一定の音声や音韻を背景とした表記と考えるには、その使用範囲があまりにも偏っている。

碑文においては、モンゴル語であろうと漢語であろうと「𐠨」のみが用いられ、明瞭に「𐠨」と確認できるものは見えない。『蒙古字韻』では「o」に続く場合のみ「𐠨」が見える。版本である『事林広記』所収の「百家姓」（いわゆるパスパ字百家姓）では、A・B・D 各本では「𐠨」のみを用い、C本にのみ「𐠨」が見える⁴。そこでは『蒙古字韻』と同様に「o」の後に「𐠨」が見えることが多いが、それ以外にも3か所（「聞」「莘」「燕」）に見えている⁵。

ロンドン写本や百家姓 C 本で、「𐠨」が「o」に続く箇所では記されるのはなぜか。それは連結線が中央に伸びているからである。連結線が右端にある場合には「n」も標準の「𐠨」となるが、中央に連結線がある場合には「n」における右端の連結線が降りてこないため、「𐠨」の字形になりやすいのであろう。「o」の場合には2種の字形は正書法によって厳密に定められたものであるが、「n」の場合は一定の条件の下に現れる自由変異であるに過ぎない。碑文によって明らかのように、「𐠨」が正式の字形であって、「𐠨」の方は手書きやそれに基づいた版本の一部に現れる変異体である。

中野(1994)はパスパ文字の総合的な解説としては今なお有用なものであるが、音声・音韻に関わる部分の記述は甚だ危い。対音資料を扱う者は、字形と音声に直接的な関連を想定することには相当慎重になる必要がある。

<参考文献>

照那斯図&楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』, 北京: 民族出版社.

中野美代子 1994. 『砂漠に埋もれた文字』, 東京: 筑摩書房.

雑で従うことはできない。

⁴ 版本 ABCD 各本の分類は照那斯図&楊耐思(1987:p.5)による。すなわち、A: 至順年間(1330-1333)刻本、B: 至元6年(1340)刻本、C: 元禄12年(1699)和刻本、D: 永楽16年(1418)刻本。

⁵ ただし、「𐠨」に続く場合には明瞭な「𐠨」であるのに対して、これら3字では「𐠨」と「𐠨」の中間的な字形に見える。